

## ロンドンオリンピック柔道競技の視察

小俣幸嗣<sup>1)</sup>

### 1 はじめに

オリンピックは今回で30回を数えるが、日本にとっては第5回のストックホルム大会(1912)に初参加しているから、実に100年目になる。その記念すべき最初の大会は、アジア初のオリンピック委員でもある嘉納治五郎が団長として引率している。柔道界ではその節目にあたる今大会を、師範の偉大な業績と重ねて、強く意味づけてきた。

柔道では、オリンピックとオリンピックの間の3年間は、毎年世界選手権大会が開催される。さらに、これらの下にグランドスラムという4大会、ワールドカップと呼ばれる国際大会が開催され、選手の世界ランキングリストが作られている。日本は世界チャンピオンを含めて、ランキングの上位に複数を擁して強豪国の実力を示している。

### 2 選手の国内選考

選手は、IJFが2009年に策定したランキングシステムによって格付けされ、この中の22位以内の選手に出場資格が与えられる。しかし、オリンピックでは国代表が一人となるので、最後は国内選考になる。こうした例は、男子で66kg級、73kg級、女子で48kg級、52kg級、57kg級で見られ、選手は5月の代表選考まで競いあうため国内戦で消耗するという事情があった。

筑波大学の関係で代表となったのは、男子60kg級の平岡拓晃(MC2年)、女子は48kg

級の福見友子(平成20年卒)、70kg級で緒方亜香里(4年)、78kg級の杉本美香(平成19年卒)の4人だった。

平岡は順当に代表の座を射止めた。福見は、北京大会まで谷亮子選手の後塵を排し世界選手権、五輪の代表から洩れていた。今回も世界選手権大会2連覇の浅見遥奈(コマツ)が台頭して苦しいと目されていたが、執念で代表の座を掴んだ。杉本、緒方は、その階級に追従する選手がいないため、無競争状態で代表に入った。また、世界チャンピオンながら、秋本啓之(66kg級、平成20年卒)、森下純平(73kg級、4年)は代表を逃した。

### 3 大会の概要

柔道競技は、開会式の翌日7月28日から8月3日の7日間にわたり男女各1階級ずつ軽い方から行われた。柔道への参加国数は135カ国地域、参加者数は男子233名、女子は154名の387名であった。

バルセロナ大会(1992)以降は、予選を経て出場資格を得る方式に変わったため、弱い国は参加できないという状況になっている。このためIJFはIOCと図り18カ国を招待した。

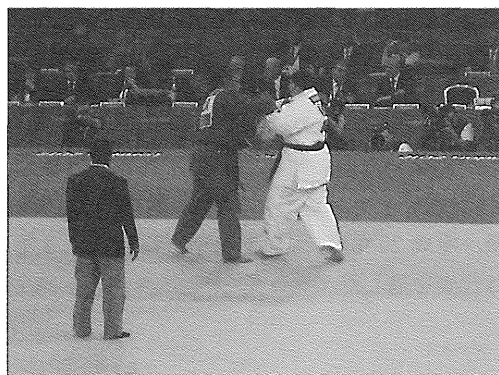
つまり出場資格と大陸枠で参加したのは117カ国になる。これらのうち23カ国地域が表彰台に上がった。特に女子では、金メダルがブラジル、北朝鮮、日本、スロベニア、フランス、アメリカ、キューバと全階級異なる国に分散した。

ロンドン大会の選手には30名以上の世界

1) 筑波大学体育系

チャンピオンが含まれ、2008年北京大会の14名のチャンピオンの内、7名が出場したが優勝したものはなかった。

女性スポーツを発展させるため、IOCによって柔道と陸上を選ばれ、サウジアラビアのウォジャン・シャヘルカニ選手（78kg 超級）が初めて参加した。この選手は宗教上の理由から頭にヘジャブを巻いて登場し、1回戦でモジカ選手（プエルトリコ）に隅返で敗れたが、その容姿が注目された。ヘジャブの着用はアジア選手権大会では認められ、既に選手も登場しているが、オリンピックでは初めてだったようだ。



ウォジャン選手（白）

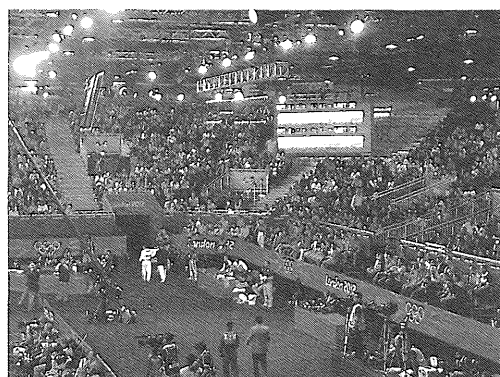
#### 4 会場

我々はJOCが大会期間中に競技団体の関係者が利用できるように準備した、インペリアル・カレッジ・ロンドンのサウス・ケンジントン・キャンパスに宿泊した。ハイドパークのすぐ南、ロイヤルアルバートホール付近の近くといえは想像つく方もいるだろう。重厚な建物街を数分歩き、サウス・ケンジントン駅から地下鉄で40分ほどかけて湾岸地域にある柔道会場のエクセルアリーナへ向かった。地下鉄の一駅分に亘る大きな建物の中に中央通路があり、左右の数カ所に競技会場が設けてあるシンプルな作りである。したがって入り口は皆一緒で、中に入ってから卓球、ウェイトリフティング、フェンシング、ボクシングなど、左右の会場に分か



エクセルアリーナ入口

柔道会場内は、いつものように正面側にテレビの席がほぼ全面を占めており、我々はその反対側の方に座った。試合場は2つ、試合場内は黄色で、外側は赤で覆われていた。近年の例だが、試合開始線はルール上存在しているが貼られてはいない。



柔道会場内

#### 5 筑波の選手の試合

柔道の初日はふたりとも筑波の卒業生であり、個人的には一層力が入った。

平岡は4回戦、フランスの若手選手に先行されてひやとしたが、落ち着いて挽回し延長戦では無難に捌いて、決勝に進出した。決勝では開始すぐロシアの選手が内股をかけてつぶれる所を股に手を入れる掬投に変化したのが、さらに相手が体を捨てて外巻込に変化したのにはまりひっくり返った。調子がよく落ち着いた試合運

びだっただけに惜しまれた。

福見は途中までいつも通りに見えたが、準決勝で北京大会のチャンピオン、ドゥミトル選手（ルーマニア）に大外刈を小外刈で返され、これが挽回できず敗れた。3位決定戦では延長戦でチェルノヴィッキ選手（ハンガリー）に小外刈に倒されメダルも逃した。福見らしくない負け方に無念さが残った。

緒方は強い組み手から技を仕掛ける戦いぶりだったが、2回戦のフェルケルク選手（オランダ）にポイントでリードしておきながら、ラスト30秒の背負投で逆転された。黙々攻撃するタイプだけに試合運びが悔やまれた。

杉本は日本の金メダルは女子1個のみという状態で迎えた最終日に登場したが、のびのびした試合で勝ち上がった。決勝は北京のチャンピオン、トン選手（中国）を倒してきたオルティス選手（キューバ）だったが、得意の内股を返されそうになってから、攻撃が出なくなり、延長の末旗判定で敗れた。



左から緒方、平岡、福見、杉本の選手達

## 6 日本チーム

日本人選手達は、豊富な経験が特別な場をさらに意識させたのか、慎重な試合運びと緊張からの硬さが印象に残った。地元イギリスの選手のように会場一杯の声援を受けて、それに呼応するように力以上の思い切りのよい勝負を見せることはなかった。唯一、松本薫選手だけは尋

常ならぬ気配を漂わせて、相手が萎縮するような戦いを展開していたのが救いだった。

日本選手に限らず、前回の五輪優勝者や世界チャンピオンでも必ずしもメダルに届いていないようだ。トップ選手が毎年4大会に顔を合わせ、さらに上位8人によるマスターズ大会などが続く中で、常に試合をして格付けされる現状では、ピーキングが難しいのだろうか。戦いが続く選手の環境にも同情したくなる。

期待された選手が不振だったのも、関係者は低姿勢である。しかし、総力としてのメダル獲得数をみると、男子は前回金のみ2個に対し、今回は金はないが4個と増加している。女子は金メダルを獲得したので好印象だが前回の金2を含む5個から、3個に減少している。結局、参加選手の半数にあたる7人がメダルを獲した。だが、金が少ない柔道は肩身が狭いようだ。

表1 オリンピックにおける日本柔道のメダル獲得数

		男子				女子			
		金	銀	銅	計	金	銀	銅	計
1992	バルセロナ	2	1	2	4	0	3	2	5
1996	アトランタ	2	2	0	4	1	2	1	4
2000	シドニー	3	1	0	4	1	1	2	4
2004	アテネ	3	1	0	4	5	1	0	6
2008	北京	2	0	0	2	2	1	2	5
2012	ロンドン	0	2	2	4	1	1	1	3

表2 メダル獲得国数

1992	バルセロナ（男女）	20
1996	アトランタ（男女）	17
2000	シドニー（男女）	25
2004	アテネ（男女）	24
2008	北京（男女）	25
2012	ロンドン（男女）	23

## 7 審判委員

正面役員席中央には審判委員が座って全試合場の映像を管理する、いわゆるジュリー席（一般にセンターテーブルと呼ばれる）がある。世

表3 国別メダル獲得数

男子				
国名	金	銀	銅	計
ロシア	3	1	1	5
韓国	2	0	1	3
フランス	1	0	1	2
グルジア	1	0	0	1
日本	0	2	2	4
ドイツ	0	1	2	3
モンゴル	0	1	1	2
キューバ	0	1	0	1
ハンガリー	0	1	0	1
ブラジル	0	0	2	2
ウズベキスタン	0	0	1	1
カナダ	0	0	1	1
ギリシャ	0	0	1	1
オランダ	0	0	1	1
(14 カ国)				

女子				
国名	金	銀	銅	計
日本	1	1	1	3
キューバ	1	1	0	2
フランス	1	0	4	5
アメリカ	1	0	1	2
ブラジル	1	0	0	1
北朝鮮	1	0	0	1
スロベニア	1	0	0	1
ルーマニア	0	2	0	2
イギリス	0	1	1	2
ドイツ	0	1	0	1
中国	0	1	0	1
ハンガリー	0	0	1	1
イタリア	0	0	1	1
コロンビア	0	0	1	1
ベルギー	0	0	1	1
オランダ	0	0	1	1
(16 カ国)				

界選手権などでは審判理事のバルコス氏（スペイン）と欧州の理事シュナイダー氏（オランダ）が司っているが、今回はさらにスポーツ委員会から1名入れることになり、スポーツ委員のバグダサロフ氏（ウズベキスタン）が入った。一方で、通常ならば各試合場に着くジュリーは置かれていないようだった。

ジュリーが映像を掌握し判定に絶対的な権限を行使するようになったのは、最近のことであ

る。2000年のシドニー大会100kg超級の篠原・ドゥイエ戦で内股すかしをめぐって紛糾したときは、映像がなかったジュリー団は為す術がなかった。その一方、世界中でテレビを見ている一般人が、再生映像を最高の位置から何回も検証できたという反省から、システムは導入された。

しかし、その運用は公平な判断を支える安全装置に止まらず、技評価へも影響力を与え、映像という“客観的データ”をもとに審判員を管理する方向へと進んだように見える。近年は、無線のイヤホンを主審につけさせてジュリーの指示を送るのが常態化した。そのため審判員同士の意思確認よりもジュリーの方を重視するあまり副審に存在感がなく、ビデオを再生し判断を下すまでの間試合が停滞し興ざめする例も少なくない。実際日本のテレビでも、「またセンターですか」「こういうの多いですね」という解説者の声が伝わっている。

今回は初日に積極的に介入するジュリーをみて、権力の暴走ではないかと憤ったが、次第に諦めにかわった。それが2日目66kg級の準々決勝で事件になった。韓国対日本戦だったが、試合は延長戦に入り明確なスコアがないまま判定になった。審判員は3人とも韓国選手に旗を上げたので、韓国の勝ちが指示されたとき、バルコス氏が出てきて中断、判定はやり直された。今度は3人が日本の海老沼選手に上げたのである。五輪や世界選手権はもちろん、柔道の試合でこのようなシーンを見たのは初めてである。このときの審判員は翌日の試合を担当しなかったと聞けが、事情はともあれ主審はIJFの審判員ランキングで1番になったブラジル人である。

この後の試合では、さらに不可思議な現象をみた。延長戦で旗判定になると、きまって3人の旗が揃うのである。3本揃うのが普通でないことは、少しでも柔道の試合を見ている人ならば、常識だろう。

これらは柔道競技の信頼性公平性を脅かし

ねない行為であり、残念だが競技史に残しておかなければならない事実であろう。

## 8 ルールの運用

罰則の適用に強弱があるのは、競技の傾向によるのでやむを得ないことである。以前は旗判定にならないよう選手に攻撃を促進し、決着をつけさせるという時期もあった。今回は逆に、本戦の5分間に罰則がほとんど適用されず、選手任せの試合展開が多かったように思える。従って延長戦が増え、さらに旗判定の増加につながった。

アテネ大会の決勝がすばらしい技の応酬によって決着したのを受けて、一時期、罰則の適用を極端に避けたことはあった。今回の意図は何だろうか。審判の作為によって試合が動かされているように見られなくなかったのだろうか。だとすると、イヤホンから主審への指示や、3人の旗判定の一致の方が何かの介入を想像させて不自然だろう。

技の判定ではビデオ判定に頼りすぎる傾向だろうか、背中に着地ばかりが強く評価され、落下する勢いなどは顧みられていない印象を強くした。ゴロンと転がったような技が高く評価されている。その一方で、畳に鋭くたたきつけられた冴えた技でも、投げられた選手の背中が十分着いていないという観点で低く評価されてい

る。柔道の醍醐味が失われていくようで気になる現象である



中央がプーチン大統領

## 9 おわりに

柔道家としても有名なプーチンロシア大統領が訪れ観戦していた。

100kg級の決勝で、北京のチャンピオン、モンゴルのナイゲン選手をロシアのカイブラエフ選手が見事な背負投で放ったとき、冷徹な面容で知られる大統領が飛び上がって万歳した姿は印象的だった。その後は役員席から降りて選手に駆け寄り、コーチらに混じって称賛するなど人間的な面を覗かせた。オランダフランス大統領や英国の閣僚などもいたらしいが、欧州での柔道人気が現れているように思えた。